

# 「通信教育生」の教育実習後の振り返りからの 「学び」の考察

## Reflection from the post-teaching training of a “correspondence student” Consideration of “Learning”

井口 美和

Miwa Iguchi

### はじめに

保育者を目指す学生にとって、幼稚園教育実習は養成校での学びを基に実際の保育現場で様々な体験を通して多くを学ぶ貴重な機会であり、併せて今後の進路にもつながる自己意識の確認の場でもある。実習での学びは、筆者等（井口・渡邊、2020、2023）<sup>1)2)</sup>も過去の研究で考察している様に多くを学び、自己課題を確認する場であることが明白である。過去の研究は通学制保育者養成校の学生（以下「通学生」）を対象としたものであったが、さらに通信教育で学ぶ学生（以下「通信生」）の実態も把握したいと考え、調査を計画した。データ収集方法等は通学生対象の前回<sup>2)</sup>と同様に行い、通信生の実態・特性を把握し、的確な学習支援と充実したスクーリング授業に繋げたいとの思いから今回の調査を実施した。

### 方 法

#### 調査協力者・調査日時及び調査方法

調査対象：A短期大学に在籍する学生のうち、2022年度幼稚園実習を終了し、教育実習事後指導のスクーリングを受講した学生（8名；男性1名・女性7名）。

調査方法：アンケート

調査時期：2022年11月（対象者全員に直接説明が可能な時期として選定）

#### 調査アンケートの内容

アンケートの内容は、「1. 幼稚園実習で実践したことを具体的に記述。」；（1番楽しかったこと）（1番苦しかったこと）。「2. 事前にもっと学んでおけばよかったと思ったことに関する自由記述。」「3. 実習を終えての振り返り（表1のコミュニケーションと保育に関しての小項目36項目）。」

「4. その他 (提出期限・実習態度・保育者資質); 表1のその他小項目3項目。」「3. 実習を終えての振り返り」; 36項目と「4. その他」; 3項目については、「全く不安を解消できなかった」から「とても不安を解消することができた」までの7段階から選択、回答を-3ポイント (以下Pと表記) ~3Pに換算して集計した。

併せて、個の状況を把握するために、中項目毎に「不安が解消できた理由の自由記述欄」を設けて調査を実施した。アンケート項目と合計値は表1の通りである。

小項目数に最大値3を乗じた値をその項目の最大値とし、最大値に対する平均値の割合を「学びの割合」と表記した。中項目の対幼児は小項目が3であるから、この項目の最大値は9Pで、平均値は6.75Pである。最大Pに対する平均Pは割合にすると75%である。

表1 アンケート項目及び合計値

大項目	中項目	小項目	最大P	平均P	学びの割合%
コミュニケーション		5	15	11.38	76
合計	(対幼児)	3	9	6.75	75)
	(対保育者)	2	6	4.63	77)
保育に関して	1 指導案	8	24	6.75	28
	2 実践	7	21	4.50	21
	3 援助	5	15	7.75	52
	4 環境の構成	3	9	4.88	54
	5 教材教具	5	15	5.75	38
	6 個別の配慮	3	9	5.88	65
その他	提出期限	1	3	2.25	75
	実習態度	1	3	2.63	88
	保育者資質	1	3	1.63	54
計		39	117	53.40	—

小数第二位 (第三位四捨五入) で表記

## 倫理的配慮

研究協力校である短期大学には、あらかじめ調査実施に関する許可を受けた。また、調査協力者には、研究目的を説明し、回答内容はプライバシーに最大限配慮すること、協力は任意であることを説明し、同意が得られた学生から協力を得た。

## 結果

### 1 教育実習での学びの確認

#### 1) 項目別集計

項目別の平均Pと学びの割合は表1に示す通りである。教育実習での学びは学生一人一人の個人での学びではあるが、全体的に見ると項目別の学びの割合は「指導案28%」「実践21%」「教材教具

38%」、それ以外の項目は52%～88%であり、実習での学びを通して不安を軽減・解消している。

## 2) 個人の集計 表2参照

### a) 項目別集計から

#### ア) 集計値から

表2 項目別個人集計値

項目	個人	A	B	C	D	E	F	G	H	平均
コミュニケーション合計		11	14	2	11	13	14	14	12	11.38
(対幼児)		9	8	1	5	7	8	8	8	6.75)
(対保育者)		2	6	1	6	6	6	6	4	4.63)
1 指導案		9	17	-6	-2	20	-4	12	8	6.75
2 実践		1	11	-2	1	4	-3	15	9	4.50
3 援助		14	11	0	14	7	-5	11	10	7.75
4 環境の構成		9	6	0	6	1	5	4	8	4.88
5 教材教具		14	10	-5	5	2	3	8	9	5.75
6 個別の配慮		8	9	0	6	7	2	7	8	5.88
提出期限		3	2	3	3	3	-1	2	1	2.25
実習態度		3	3	3	3	2	-1	3	3	2.63
保育者資質		3	2	0	1	3	-1	1	2	1.63
個人合計		75	85	-5	48	62	9	77	70	53.40
学びの割合%		64	73	-4	41	53	8	66	60	45

小数第二位（第三位四捨五入）で表記

個人の合計は8名中7名がプラスになっており、学びの割合は-4%～73%、平均は45%である。

#### イ) 項目別自由記述から

表1に示すように、項目毎の学びの割合は全てプラスである。表2に示すように個人の学びの割合が高いコミュニケーション関係の項目と、割合の低い「保育に関して；指導案・実践・教材教具」について自由記述を表3にして比較した。

表3 自由記述

コミュニケーション

<p>対幼児 学びの割合 75%</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・こどもはどの子も純粋で素直だと知れた (B)</li> <li>・何が正解かわからない (C)</li> <li>・活動の切り替えができない幼児に対して、意欲的になるような声かけがもっとできたらよかった</li> <li>・子どもと遊ぶことによって沢山話せた</li> <li>・まず最初に飛び込んでみる！！</li> <li>・思い切って入ってしまえば、少しずつ子どもに受け入れてもらえると感じた</li> <li>・無記入 3 (F)</li> </ul>
<p>対保育者 学びの割合 77%</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生達は忙しいので挨拶位しかできなかった</li> <li>・コミュニケーションや質問はできなかったら、自分が苦しむ (B)</li> <li>・消極的になってしまった (C)</li> <li>・気になることは保育後に質問し、その日のうちに解消できるよう意識しました</li> <li>・分からないことはすぐ聞いた</li> <li>・無記入 3 (F)</li> </ul>

保育に関して

<p>指導案 学びの割合 28%</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導案の書き方は難しかった</li> <li>・余りそのクラスに入らないまま指導案を立てねばならず子どもの姿が見えなかった (B)</li> <li>・指導案について書き方がイマイチ分らなかった。調べても納得のいく書き方がなかった。何を特化して書くべきか分らなかった (C)</li> <li>・指導案は全体的に詰めが甘かった。しかし甘かったからこそのご指導をいただけたので上手くいなくても学びになれば良いんだと思った</li> <li>・活動・時間が難しかった</li> <li>・実習先で製作するのを実際に見ることができなかったためどう声かけをしているのか学べず聞くことしかできなかったのが不安だった (F)</li> <li>・無記入 2</li> </ul>
<p>実践 学びの割合 21%</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・失敗が経験になった。何事もやってみること (B)</li> <li>・保育展開の仕方や導入の方法がわからない (C)</li> <li>・時間配分が難しかった</li> <li>・無記入 4 (F)</li> </ul>
<p>教材・教具 学びの割合 38%</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無記入 8 (B) (C) (F)</li> </ul>

表内の文末に (B)(C)(F) と記入してあるのは後述のC) 合計Pが特徴的な学生の記入事項である。

b) コミュニケーション関係項目から 表4参照

以前の通学生への調査アンケートではコミュニケーション関係のPと合計Pに関係性が見えたこともあり、今回は学びの割合について対幼児・対保育者・コミュニケーション合計（以下コミュニケーションと表記）を抽出して比較した。

表4 コミュニケーションと合計の学びの割合%

	対幼児	対保育者	コミュニケーション	合計
A	100	33	73	64
B	89	100	93	73
C	11	17	13	-4
D	56	100	73	41
E	78	100	87	53
F	89	100	93	8
G	89	100	93	66
H	89	67	80	60
平均	75	77	76	45

## C) 合計Pが特徴的な学生の事例 表5参照

特に学びの割合の高いB、学びの割合がマイナスであるC、半分の項目で学びの割合がマイナスであるFの比較である。Bは全項目平均的に学びの割合が高く、多くを学んだ様子が伝わる。Cは合計がマイナスではあるが、「その他」の項目では、提出期限と実習態度がそれぞれ3Pであり、この項目の学びの割合が67%と実習に頑張っただけで臨んでいた様子がうかがえる。

一方Fは「指導案」「実践」「援助」「提出期限」「実習態度」「保育者資質」についての学びの割合がマイナスであるが、コミュニケーションの学びの割合が高く、合計ではプラスになっている。

表5 合計Pが特徴的な学生の項目別集計

	B		C		F	
	合計P	学びの割合%	合計P	学びの割合%	合計P	学びの割合%
コミュニケーション合計	14	93	2	13	14	93
1 指導案	17	71	-6	-25	-4	-17
2 実践	11	52	-2	-10	-3	-14
3 援助	11	73	0	0	-5	-33
4 環境の構成	6	67	0	0	5	56
5 教材教具	10	67	-5	-33	3	20
6 個別の配慮	9	100	0	0	2	22
提出期限	2	66	3	100	-1	-33
実習態度	3	100	3	100	-1	-33
保育者資質	2	66	0	0	-1	-33
個人合計	85	73	-5	-4	9	8

d) 自由記述項目から

教育実習での取り組みと成果を具体的に把握したいと考え、「1番楽しかったこと」と「1番苦しかったこと」「事前に学んでおけばよかったと思ったこと」の自由記述欄を設けた。結果は以下の表6である。

表6 楽しかったこと・苦しかったこと・事前に学んでおけばよかったと思ったこと

1番楽しかったこと	1番苦しかったこと	事前に学んでおけばよかったと思ったこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・部分実習の製作を楽しんでくれた</li> <li>・子ども達と一緒に遊びを楽しんで仲良くなれたこと (B)</li> <li>・特になし (C)</li> <li>・昨日より今日の方が子ども達との関わりを深めていけたとき</li> <li>・子どもにプレゼントをあげて泣いてくれたこと</li> <li>・子どもと一緒に遊んだこと (F)</li> <li>・日々一緒に沢山遊んだこと</li> <li>・子ども達と一緒にボール活動をしたり園庭やお部屋で遊んだこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2週間で子どもとの信頼関係のようなものが余り作れなかった</li> <li>・1日実習の準備 (B)</li> <li>・完全実習 (C) (時間配分や製作のレベルなど)</li> <li>・実習記録</li> <li>・我が子の預け先が無くなった時 (シッターさん呼びました)</li> <li>・部分・完全が上手くいかなかったこと</li> <li>・実習簿・指導案に追われる日々 (F)</li> <li>・上手く伝えられず、時間がかかり子どもに負担をかけたこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアノを弾けるようになっておきたかった</li> <li>・手遊びのレパートリーを増やしておきたかった</li> <li>・設定保育について</li> <li>・指導案の書き方</li> <li>・幼児理解</li> <li>・部分実習での予測を様々な方向から立てておくこと</li> <li>・けんかの時の声がけ</li> <li>・子ども達への言葉かけ、どう伝えたら分かりやすいか</li> <li>・実習簿の記録の仕方に不安があり多くの時間を割いた</li> <li>・日常の活動も記録を書きやすいようにと意識する分、子どもとの関わりは減ってしまったと感じた</li> <li>・事前に十分確認したり練習ができていたら、もっと子どもとかかわることができたり、その他のことに意識を向けられたと思う</li> <li>・導入の様々なやり方 臨機応変に動けるように、色々な引出しをもっておくようにしておけば良かった</li> </ul>

表内の文末に (B)(C)(F) と記入してあるのは合計Pが特徴的な学生の記入事項である。

保育を実践するための指導案作成や、準備、実践で苦労はしているが、ほぼ全員が幼児との直接

の関わりを楽しんでいたことが記載されている。Bは苦しさと併せて楽しい経験があったことが記載されている。

## 考 察

### 集計値から

各項目の集計結果は、前述のように中項目の合計Pに対する個人の合計Pの割合を「学びの割合」と表記して比較した。

学びの割合で項目別に比較すると、割合が高いのは「コミュニケーション」で、「指導案」「実践」「教材教具」の3項目は割合が低い。この項目の自由記述では、コミュニケーション関係は意欲的に取り組んでいた様子が記入され、保育に関する項目は「難しい・わからない」という表記が目立つことから、苦勞していた様子が見えてくる。

特に「指導案」「実践」「教材教具」の3項目は、教育実習において保育を実際に実践するために不可欠なものであり、限られた日程の中で計画し実践しなければならないものである。机上学習と併せて、立案経験や模擬保育等の実践経験が直接学びにつながるものである。そのために、これらの経験の少ない通信生にとっては、特に実践で苦勞した内容であると考えられる。これらの項目について、授業内容を充実させ、学生の直接経験としての経験値を上げていく努力をすることが、通信教育では重要であると感じた。

### コミュニケーションに注目して

個人別にコミュニケーション関係の中項目について学びの割合を比較すると、幼児とのコミュニケーションが75%、保育者とのコミュニケーションでは77%、平均すると76%であり、多くの学生が、学びの成果を大きく実感していることが示されている。特にコミュニケーションの学びの成果において幼児に対して100%と判断した学生が1名、保育者に対して100%と判断した学生が5名であり、学びの実感の大きさを示していると思われる。

また、コミュニケーションの学びの割合と、全項目の合計の学びの割合については、

- ・コミュニケーションの学びの割合・合計の学びの割合>平均値は、4名
- ・コミュニケーションの学びの割合・合計の学びの割合<平均値は、2名
- ・コミュニケーションの学びの割合>平均値で、合計の学びの割合<平均値は1名
- ・コミュニケーションの学びの割合<平均値で、合計の学びの割合>平均値は1名である。これらの結果については、自由記述の内容や対象学生の実態（保育補助等として幼稚園で勤務している・保育と無関係の職についている等）を把握しての考察が必要であると考え、今回のアンケートの学びの割合の比較からも、実習におけるコミュニケーションの在り方が、実習全体の学びの割合にも大きく影響していることが見えた。

### 合計Pの特徴的な学生の事例から 表5参照

Bは全項目学びの割合が平均以上で、全般的に努力し、本人も学びの成果を実感していることが

伝わる。一方Cはその他の項目に着目すると、3項目中、日誌等の提出期限と実習態度のPがそれぞれ3であり、学びの割合が67%、それ以外の中項目は学びの割合が全て平均以下である。しかし、指導案の自由記述欄「指導案について書き方がイマイチ分らなかった。調べても納得のいく書き方がなかった。」とある様に自分なりに調べたり、提出期限厳守等から、実習への取り組みの姿勢は評価することができる。本人にとっては学びの実感は乏しいと思われるが、実習に臨む姿勢としては頑張っていたことが伝わる。

合計Pには表れないこのような姿勢も丁寧に把握し評価していくことが本人の実習での学びの確認、さらに次の学びの意欲へと繋がっていくと考える。

一方Fは「指導案・実践・援助」「提出期限・実習態度・保育者資質」について学びの割合がマイナスであり、全体の学びの割合とほぼ同じ傾向を見ることができる。Fは大部分の自由記述は未記入で、「不安だった様子」が記入されている。具体的な学びの実態を把握するには、もう少し丁寧な聞き取りなどを行うことが必要と考える。

#### 自由記述から

1番楽しかったこととして、特になしの1名を除き、全員が幼児との直接的な関わりをあげており、実際に幼児とふれ合うことが大きな喜びであり、楽しかったことが伝わる。しかし、教育実習の目的には、幼児と触れ合うことを通して「幼児の想いや発達を理解する幼児理解」も学びの内容として含まれているので、この点では学びの深さにやや不足が感じられる記述である。一方、1番苦しかったこととして、実際に指導案を立案し保育を実践する体験が挙げられている。幼稚園教育実習の大きな目的の一つが「保育を実践する」ことであるから、これらの苦勞を体験することによって、それぞれの学生が苦しみながらも目的に向って学んでいたことが伺える。

さらに、事前にもっと学習しておけばよかったという振り返りの項目では、幼児との関わりやピアノ・手遊び等もあるが、設定保育・指導案・部分実習・幼児理解等保育展開に関わる内容が挙げられている。

#### 今後の課題

今回のアンケートを通して、全体的に学びの割合は50%以下ではあるが、大部分の通信生は4週間の教育実習を終えて多くの学びを実感していることが確認された。通信生にとって教育実習は、実習に必要な単位を履修し、実習先の選択・交渉等全て自力で実践してたどり着いた学びの機会である。サンプル数としては非常に少なく考察も浅いが、家庭や職場等との関係を保ちながら、様々な問題や課題を自分の力で乗り越えてきた通信生ならではの学びを見ることができた。

また、対象者数の少なさの他に、対象者の背景の調査も必要であると感じた。今回の調査対象には、スクーリング時の学生の自己紹介などから保育補助等の職種で既に保育現場で勤務している学生もかなりの割合でいることが把握できたが、アンケートではそれらの学生の回答を分類することはできていない。同じ通信生でも、全くの異職種から初めて幼稚園・認定こども園に足を踏み入れ

た学生と、立場はどうあれ既に職業として園生活や幼児との関わりも体験している学生の「教育実習での学びの違い」にも今後着目していきたい。

今回のアンケートから見てきた「指導案・保育実践・教材教具」等の指導内容や指導方法の改善を図ることで、通信生の学びを深め、教育実習での更なる学びの割合の上昇を期待したい。

### 参考文献

- 1) 井口美和・渡邊 舞. (2020). 保育者養成課程で学ぶ「専門学校生」の実習前後の想いと自己成長感に関する研究. 豊岡短期大学論集. 16. 59-68
- 2) 渡邊 舞・井口美和. (2023). 保育者養成課程で学ぶ「専門学校生」の実習への想いに関する研究；実習を通しての意識の比較. 豊岡短期大学論集. 19. 69-77

